

ジリジリと照りつける太陽と西日本特有のクマゼミの大音量の中、カメラマンと私は、水田のあぜ道を息を殺してシャッターチャンスを狙っていた。合鴨は非常に用心深い。人の姿が見えていれはまず寄ってこない。気配を感じるとさっと逃げていく。1ヘクタールはあろうかという広い水田を合鴨の集団がいくつもの群れになって悠々と泳いでいる。合計すると100羽以上はいるだろうか。「グァーグァーグァー」と鳴く成鳥もいれば、「ピーピーピー」と鳴いている雛もいる。ある者は水面下に首を突っ込み、ある者は苗に止まっている虫をついばんでいる。合鴨農法とはおこめの有機無農薬栽培の一つの形態で、田植え後の水田に合鴨を放し、雑草や害虫を食べさせる事によって除草剤や農薬を使用せずに済む画期的な農法である。加えて、合鴨の排泄物が有機肥料となるだけでなく、合鴨が泳ぐ事による攪拌作用によって根を刺激し栄養分の吸収が良くなると同時に合鴨を育てている。稲作と畜産を同時に行っているのだ。100羽もの合鴨が泳ぐその水田は合鴨達の攪拌によって徐々に泥水色に染まっていた。我々は気温35度の中、あぜ道に腹這いとなり、自然と一体となって合鴨が寄ってくるのをじっと待った。その間およそ1時間。滴る汗を拭うことも忘れ、ひたすら待った。

福岡県嘉穂郡桂川町(けいせんまち)。福岡県中央部に位置する人口1万3千人程の町で、筑豊地区を構成する他の自治体同様に1970年頃までは炭鉱の町として栄えた。炭鉱閉山後は人口も半減したものの2000年頃までは微増。その後、日本全国の多くの自治体同様に減少傾向が続いている。その桂川町の北西部に寿命(じゅめい)という集落がある。そこは、東に金比羅山古墳丘陵、西は穂波川に囲まれていて、一面のどかな田園風景が広がっていた。古野家はこの地で代々農業を営んできた。「私で何代目かは見当もつきません」。そう答えるのは、古野農場の農場主である古野隆雄さん(69歳)だ。隆雄さんは合鴨農法の第一人者と言われている。「合鴨水稲同時作」の技術を確立し、その技術を国内外に普及させた功績で2000年にはスイスのシュワブ財団より、「世界で最も傑出した社会起業家の一人」として選出された。書籍も多数発刊しており、2007年には「アジアの伝統的アヒル水田放飼農法と合鴨水稲同時作に関する農法論的比較研究-開い込みの意義に焦点をあてて-」という論文を提出し、九州大学で農学の博士号を取得している。加えて同年、NHKの人気番組「プロフェッショナル仕事の流儀」に『失敗の数だけ、人生は楽しい』というタイトルで出演している。現在でも、講演依頼は後を立たず、依頼があれば農作業の合間を縫っ

て国内外を飛び回っている。一体何者なのか?と水々を向けると「ただの百姓です」。と本人は素っ気ない。しかし、隆雄さんの言う「百姓」という言葉の本当の意味を理解するのに、それほど時間はかからなかった。

最初的一步

1950年、隆雄さんは古野家の長男として生を受けた。幼い頃は、春から夏にかけて川で魚を獲り、秋から冬にかけては山で鳥を獲るというような野性味溢れる少年時代を過ごした。「机にじっと座っているのが苦痛でした。小学校1年まで“あいうえお”を書けなかったですよ」と述懐する。そんな隆雄さんが衝撃的な光景を目の当たりにするのは中学生の時であった。水田に撒いた除草剤PCPの影響で、魚が腹を見せ、ブカブカ浮いて死んでいたのだ。有機無農薬農業を志した原点と言って良いかもしれません。

その後、大学に進学した隆雄さんは一冊の本に出会う。有吉佐和子さんが書いた「複合汚染」だ。そこに書かれていた事は隆雄さんが中学時代に目の当たりにした出来事のものであった。

「中学の時に体験した事と、この本に書いてあった事がより深いところで繋がりました」。1978年、隆雄さんは大学院を中退し家業の農業を継ぎ、有機無農薬農業に取り組んだ。「食べ物に農薬をかけるのはいのちに農薬をかける事、翻ってそれは人間に農薬をかける事と同じだと思えたんですよ」。隆雄さんが有機無農薬農業を志した最初的一步だった。

苦難の末

とはいえ、当時は有機無農薬の実践者は周囲には皆無であった。自ら考えてやるしかない。限られた情報や繋がりを手掛かりに近隣の同志と有機農業研究会を立ち上げ試行錯誤を繰り返した。1981年に久美子さんと結婚。その後、父親の熊雄さんが還暦を迎えた事で経営を移譲され、およそ2ヘクタールの水田と畑で有機無農薬を実践した。当初は失敗続きで、様々な方法を試すがうまくいかず「食べていけるやろうか?」という久美子さんの心配に「食べ物を作っているから食べてはいけるばい」と隆雄さんは即答したという。また、多くの有機農業者が雑草取りの苦勞を語るように、隆雄さんも雑草との格闘に終始した。久美子さんと二人で早朝4時から夜の9時まで雑草を取る事に明け暮れた。「この時期はつらい思い出しかありません」。当時の隆雄さん、久美子さんにとって有機無農薬は苦しいものだった。

転機が訪れたのは1988年。富山県に住む置田敏雄さんが「合鴨除草法」なるものを実践している事を知り、その資料を取り寄せ早速実践。非常にうまくいったという。ところが、喜んだのもつかの間。その合鴨が野犬に襲われたのだ。「100羽放って、翌日90羽殺されるというような状態でした」。当時を振り返ると、この時が一番苦しかったという。「何

をやってもダメで、万策尽きていました。自分はバカなんじゃなかろうか」と、半ば投げやりになっていたという。そんなある日、山間の知人宅に訪問した際、猪防除用の電気柵を目にした。「直感的にこれだ!と思いました」。隆雄さんは早速、電気柵を水田に設置したところ大成功だった。3年に渡る野犬との闘いに終止符を打った。その後も試行錯誤を重ね、「合鴨水稲同時作」の技術を確立した。

自然情報から問いを立てる

「合鴨水稲同時作」とは囲いをした水田に合鴨の雛を放ち、雑草や害虫を食べさせる事で稲と合鴨を育てる。稲作と畜産を同時に行うので同時作だ。隆雄さんはこれを「ご飯とおかずを一緒に育てているようなものです」という。この農法の効果は害虫防除や除草だけに留まらない。合鴨の排泄物は肥料になり、足で水と泥を掻く攪拌作用により根に栄養分が吸収されやすくなる。加えて、クチバシで稲をつつく事による刺激効果で、稲の植物性ホルモンが出て茎数が増え、茎太で丈夫な稲ができるという。また、稲の収穫期を前に役目を終えた合鴨は処理され肉となる事で、コメの収入だけでなく肉の収入も加わり経営も安定する。合鴨のおかげで除草や害虫防除の手間が省け、有機無農薬農業でありながら身体的負担の少ない効率的な農業が実現した。出版した書籍は英訳され、環境にも経済にも嬉しい農法として国内外で広がり、隆雄さん自身もアジアでの伝播、普及に奔走した。

隆雄さんは自然情報と人工情報のバランスを保つ事が極めて重要だと口癖のように訴える。人工情報とは書籍やインターネットを調べる事で出てくる情報で、人が整理した情報の事である。これに対し自然情報とは自分が五感で感じる情報だという。現代

はインターネットを検索すれば膨大な人工情報に溢れていて大抵の事は調べる事ができる。しかし技術革新の源泉やクリエイティブの種は自然情報の中にしか存在しないと断言する。人工情報の肥大化とそれを簡易に検索できる事によって「調べる」事を「考える」と混同している人が増え、あまりにも人工情報に偏りすぎている事に警鐘を鳴らす。「考える」とは、まず最初に「問いを立てる」事から始まる。かつて、天才と呼ばれたレオナルド・ダ・ヴィンチは、一般の人が見過ごすような些細な自然情報に接しても、常にそこから問いを立てていたという。隆雄さんは毎日接している自然情報の中から、問いを立てるという事を無意識に行っていたのではないかと。そして、その問いを学術的な観点だけでなく、生業である農業として解決する方法を考え続けた事が「合鴨水稲同時作」というものを生み出した。それこそが、隆雄さんが合鴨農法の第一人者と言われる真の所以だと私は感じた。



最初的一步、その足跡が未来へ繋がる道となる

farmer's inside stories and delicious foods world

farmer's inside stories and delicious foods world



特集
合鴨家族
古野農場
文：梶原圭三
写真：川上和禎